

『妖怪アパート萃夢想』

——鬼さんごちうら、手の鳴る方へ……

光琳堂から一歩足を踏み出したレイム。だが、そこはどこの屋内だった。木で出来た床。年期の入った内装。どこか古めかしい、アパートのようだ。

続けて扉から飛び出すサナエやアキユウだが、そんな三人を呼び止める声があった。

「うら、部屋の中では靴を脱げと、親に教わらなかったのかいっつ」

そう言われ、慌てて靴を脱ぐと、三人は再び声のする方へ顔を向ける。

そこには角の生やした、幼い姿をした少女、

「おや、どつした？ 鬼でも見たような顔をして」

——満面の笑みを浮かべた鬼。威吹スイカがいた。

【OPp】 じゃにサービーでいけーつ

「私は管理人の威吹スイカ。よろしくね」

管理人室に案内されたレイム達は、彼女から自己紹介を受ける。今までのように、「悪魔」と呼ばれ戦いにならない事に戸惑いを覚えながら、レイムは事情を説明。異変は起こっていないかと尋ねる。

だが、彼女は首を横に振り、そんなものは無いと答えた。どうやらこの世界では、まだ何の異変も起きていないのである。

なら自分がここに飛ばされた理由は何なのか。自問しているレイムに、スイカは酒をあおるといつ提案した。「異変がないなら、私が作ってあげようか」と。

スイカの提案はこうだ。日が沈むまでに逃げる自分を捕まえることが出来れば、何でも好きな望みを叶えること。ただし捕まえられなければ、そこにいるアキユウを連れ去るというものだ。

突然条件に含まれ狼狽するアキユウだが、レイムは「それならごっちゃんも損はないわね」と言いつつ笑うと、快く提案を受けらる。「悪魔……この悪魔……と怒るアキユウを無視して。

鬼ごっこ開始。目の前に立つスイカに飛びかかるサナエだが、突然霧のよつに消え去る。それを見たレイムは、「密と疎を操る能力か……」と呟る。

消えられたのは勝ち目がなると、早くもあきらめ気味のサナエ

だが、スイカはこの萃夢荘からはでないと約束していた。レイムはその言葉を信じ、とにかくアパート中を探さようと言って解散する。

レイムはアリス（人形作りの内職）の部屋や、パチュリー（鳴かず飛ばすの小説家）へ。

サナエはヨウム（上京したて）の元へ。

だがどこにもおらず、まだ見つけてもすぐに逃げられる。

「これじゃあ、望みを叶えてもらつてごっちゃんいわね」

廊下に追い出され、相手の場所も分からないレイムがそう呟くと、「それじゃあそいつは、私のもんだな」という声があった。

レイムの頭上を跳び、着地した少女は、魔理沙だ。

「私がスイカを捕まえて、あいつの瓢箪をいただく。邪魔すんなよレイム！」「やってみなさいよ。そう簡単にあいつは捕まらないわよっ」

自信満々にそう言うレイムだが、それに対して魔理沙は余裕の表情。一枚のカードを取り出し、銃に挿入する。

召還されたのは、【三月精】だ。

「ごっちゃん使い方もあるってなー」

魔理沙は【スターファイア】に相手の位置を探してもらったのだ。スイカの居場所を見つけた魔理沙は、自分だけそこへ移動するために、【サーミルク】と【ルナチャイルド】で音を消し自分の姿を隠す。

「つやられたー」壁を叩くレイム。と、同時にアリスとパチュリーが部屋から出てくる。

静かにしないレイムに、ついに堪忍袋の緒が切れたのだ。叩きのめして黙らせようと、二人はレイムに襲いかかる。

庭に飛ばされたレイム。人形遣いと魔術師のコンビに、レイムは【天子】のカードを使い変身。

「何だかややこしくなってきたわねー」

緋想剣を手にとると、二人に向けて構えを取る。

で、次回。

『破〜死』

「じゅんぐだやー」

管理人室のチャイムを押し、メイリン。だが誰も出ないので、今日は駄目かため息をつく。いつもは営業で来る自分にも、友達のように接してくれるスイカが、彼女にとって辛い仕事の中でも唯一の楽しみなのだ。

物音がするから、恐ろしく住人は中にいるのだろう。

それにしても――

「今日は何だか、賑やかですねー」

声と共に、土煙が立ち上った。

【OPen】

「今日は随分と賑やかな、サクヤ」

アパートの北の端。日の全く当たらない一室で、シミリアは優雅に紅茶を飲んでいた。傍にはお付きのサクヤも一緒だ。そこに霧から元に戻った、スイカがやってくる。

「楽しそうねスイカ。何か面白いこともあったの？」

「ああ。萃夢荘に、変わった風が吹いてきたのだ」

笑って酒を煽るスイカに、シミリアも「良かったわね」と微笑――

「見つけたぜ鬼っ子おおー!!」

ドアが完全に破壊された。

スライディングしながら中に突入してきた魔理沙。そんな彼女にサクヤは激怒。

「シミリアお嬢様は部屋に引きこもりすぎて、この部屋以外の空気を吸ったら死ぬと思ひ込んでいるのよ！ 何をするの！」

「そこまでは思っていないわよ……。まあでも、ノックも無視に入ってくるのは失礼よね」

スイカを捕まえるはずが、魔理沙はシミリア&サクヤとの戦いになってしまっ。

レイムと魔理沙が戦っている間に、アキユウは「コロ」にスイカの行方を尋ねる。

すると彼女は、「あのキなら、きつと最後にあそこへ行く」と教えてくれる。

時刻は既に夕刻。日が沈もうとしているとコロだ。アキユウはアパートの屋根の上に向かっ、コロコロの言葉通りの、彼女はそこで酒を飲んでいた。

「ああ楽しかった、夕々に酒が美味しかったよ。あのがてっ」

そう言って、アキユウに捕まろうとするスイカ。だが、そこで「待てー!!」と止める二人の声があった。

それはポロポロになったレイムと魔理沙。

「勝手に満足されて」「勝手に終わられたら、こっちも困んだよ」「アキユウを下がらせ、臨戦態勢に入る二人。スイカはもう鬼ごっこは十分楽しんだ、だからお終いだと言うが、二人はそれに頷かない。

「追うのも、逃げるのも。向き合っても戦うのも、全力でやるから楽しいんですよ。満足するんですよ。」

「だったら、まだこの鬼ごっこは終わりにゃねえ」

「まだ私は、満足してないんだからなー!」

戦う気満々のレイム・魔理沙の姿に、スイカは満面の笑みを浮かべる。同じ場所に住んでいるのに、ほとんど繋がりの無かった萃夢想。見渡せば、自分と二人のことをアパートの住人達が観戦している。風変わりな風は、いつの間にかアパート中を巻き込んでいたのだ。

「一体何者だ、あなたたちは?」

答える台詞は、決まっている。

「通りのがりの解決屋だ、覚えときなさい!」

「通りのがりの解決屋だ、覚えておけ!」

二人の攻撃を躲し、周囲の大気を密めていくスイカ。

空が闇に覆われ始め、満月が顔を出す。

「楽しいねえ! 嬉しいねえ! こんな宴は又方振りだよー!!」

その言葉に反応してか、ブックケースからカードが飛び出ると、スイカのカードが解放されていた。魔理沙は「それ使っと、益々手がつけられなくなると、いいのか?」とレイムに問うが、彼女は躊躇わず発動。

「言ったでしょ。全力でやらなきゃ、私は満足できないのよ!」「FSによって巨大化するスイカ。対するレイムと魔理沙は自らのLASを発動し、同時に攻撃を行う。(夢想封印・蹴とマスタースパーク)

タースパーク)

翌朝。少しポロさが増した萃夢想。

カードが解放されたため異変はとっちらやらく分からないうちに解決していたらしい(真実は、萃夢荘の住人たちに、見えない壁が出来ていたということが異変だった)

魔理沙は朝目が覚めると、「今度は私一人で勝って、お宝はいたたくせ」と書き置きを残しなくなっていた。

宴会あけでフワフワになりながら、スイカは「楽しかったよ、また遊びにおいで」と、レイム達と握手をして分かれる。

レイム、光琳堂へ。そこにいたサナエに何をしていたんだと聞くと、途中からヨウムと二人でお茶をしながら話していたらしい。

呆れるレイムとアキュウに、弁明しようとしたその時、新たなスクリーンが降りてきた。

紅い館と、湖が描かれた世界。

次は、紅魔郷の異変世界だ。